

第3章 安全を確保するための措置

1 安全管理（＝危機管理（リスクマネジメント））の考え方

- ・ 想定される危険を予知し、事前にその対策を徹底的に講じる。
- ・ さらに万が一を想定して対応策を準備するとともに、スタッフに対する教育を徹底する。（自らの研鑽、資格取得などを含む）
- ・ 当該プログラムの安全対策を説明し、安心して自分の指示に従うよう要請することに加え、最終的には参加者に自分の身は自分で守ることを理解させる。

2 危険の要因

自然環境をフィールドとした取組には日常と異なる様々な危険が存在します。安全で安心な活動を参加者に提供するためには、いかに危険に気づけるかということが大きなポイントとなります。

危険要因には自然環境の状況や状態などに起因する「外的要因」と、行動をともにするグループ内の人やガイドに起因する「人的要因」に分けられ、それぞれ主に以下のとおり分類されます。

■外的要因

①自然環境の危険		
気象・気候による危険	自然事象・災害による危険	地形の条件などによる危険
天候の急変、豪雨、落雷、突風、吹雪、霧、気温、水温 など	落石、雪崩、雪洞崩壊、雪庇、土石流、鉄砲水、火砕流、山火事、倒木 など	急斜面、屋根、岩場、水深、水量など

②生物的な危険		
動植物などの危険	病気疾患などの危険	技術・技能不足による危険
ヒグマ、マムシ、スズメバチ、キタキツネ、ウルシ、毒キノコなど	低体温症、心臓疾患、熱傷、凍傷、骨折、熱射病、熱疲労、感染症など	転倒、滑落、衝突、落下、落水、道に迷うなど

③社会・文化・人為的な危険		
人間関係による危険	文明に起因する危険	ガイドなど主催者側の過失による危険
人間関係のこじれなどによる精神的身体的危険	刃物や火器類の誤操作によるケガ、テントの火災など	用具などの管理不足、ツアールートの前確認、非常事態発生の対策の怠慢、安全知識の不足、危険に対する感受性の不足など

■人的要因

①知らない	②できない	③やらない
危険に対する理解と認識の不足	技術的に未熟、心身の不調や準備不足により能力が発揮できない	判断ミス、軽率、怠慢、忘却、気のゆるみなど

※表は「北海道アウトドアテキスト [リスクマネジメント編]」P 6 より

3 対応策の事例

(1) 気象に関する知識

フィールドの気象、特に山の気象は変化が激しい上、ひとたび荒天になると事故の引き金となります。事故を未然に防ぐためにも、天気予報は極めて重要です。

現在は気象予報がかなり正確になり、テレビやパソコン、スマートフォンなどで最新の気象状況が簡単に入手できるようになりました。

しかし、ただ単に晴れか雨かではなく、気象の傾向全体を把握しておかなければなりません。そのためには活動予定日の数日前から天気図を注意して見ておきます。

気圧や気流がもたらす気象のメカニズム、季節ごとの気象の特性などに関する知識を高めておくことも重要です。

(2) リスクから身を守るウェア類の工夫

夏山・冬山の登山やウォーターフィールドなど、それぞれの状況に応じて、登山靴、防寒衣、レインウェア、ライフジャケット、ヘルメットなどの服装等の準備が必要です。

また、特にマダニの活動が盛んな春から秋にかけては、マダニに噛まれる危険性が高まることから、草むらや藪など、マダニが多く生息する場所に入る場合には、長袖・長ズボン（シャツの裾はズボンの中に、ズボンの裾は靴下や長靴の中に入れる、または登山用スパッツを着用する）、足を完全に覆う靴（サンダル等は避ける）、帽子、手袋を着用し、首にタオルを巻く等、肌の露出を少なくすることが大事です。

(3) ファーストエイドキットの例

野外活動の際には、いざという時に備えてファーストエイドキット（救急セット）を用意しましょう。以下に紹介するのはファーストエイドキットの例ですので、これを参考にしながら活動のフィールドに合ったものを選んでください。

なお、ファーストエイドキットを収納する容器は、完全密閉（防水）のものにしましょう。

■ファーストエイドキットの例

<ul style="list-style-type: none"> ●消毒用綿棒 ●救急絆創膏 ●包帯 ●ガーゼ ●三角巾（大） ●はさみ ●洗浄綿 ●毛抜き <p style="text-align: center;">外傷などのトラブルに備えて これくらいは用意しておきたい。</p>	<ul style="list-style-type: none"> ●安全ピン <p style="text-align: center;">大小いくつかのタイプがあると、 保定や固定など多用途に使えて便利。</p>
<ul style="list-style-type: none"> ●テーピングテープ（直接肌に巻く場合はアンダーラップをすること） ●バンテージテープ ●キネシオテープ（セラポアテープ） <p style="text-align: center;">テープ類は、粘着・非粘着・伸縮など いろいろなタイプを用意したい。</p>	<ul style="list-style-type: none"> ●レスキューシート <p style="text-align: center;">遮熱と防風に優れ保温効果が高い。 コンパクトなのでぜひ用意したい。</p>
<ul style="list-style-type: none"> ●サムスプリント（携帯用副木） <p style="text-align: center;">広げて任意の形に折ると、 患部に沿った形で固くなるので固定に便利。</p>	<ul style="list-style-type: none"> ●急冷シート（冷えピタ・熱ひえシート等） <p style="text-align: center;">打撲・ねんざ等の患部冷却に便利。</p>
<ul style="list-style-type: none"> ●ポイズンリムーバー <p style="text-align: center;">有害昆虫などに刺された際に 毒性分を吸い出す器具。</p>	<ul style="list-style-type: none"> ●使い捨てカイロ <p style="text-align: center;">天候急変時の体温調節や衣類の乾燥等に便利。</p>
<ul style="list-style-type: none"> ●ディスポーザブル手袋、ゴム手袋 ●マウスピース、人工呼吸用マスク <p style="text-align: center;">テープ類は、粘着・非粘着・伸縮など いろいろなタイプを用意したい。</p>	<ul style="list-style-type: none"> ●鎮痛・解熱剤 ●止瀉・整腸剤 ●抗ヒスタミン剤含有ステロイド軟膏 <p style="text-align: center;">体調悪化に備える薬は 普段から使い慣れているものがベスト。</p>

※表は「北海道アウトドア講習／北海道アウトドア検定 [基礎編] 共通テキスト」P41より

4 事故への対応

(1) 事故対応の流れ

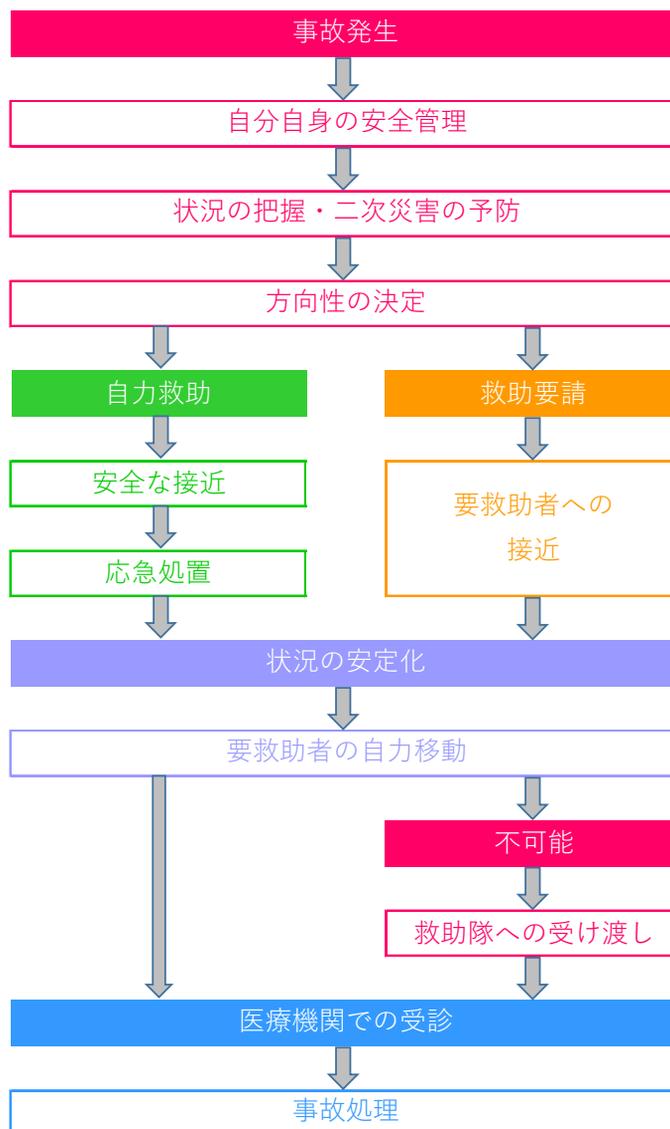
医療機関から離れた場所で行われることも多いガイド活動において、病院では手当可能な傷や治療可能な病気であっても、ときに重大な事故へと発展する場合があります。

緊急時には平地と同じように救急隊が駆けつけてくれるとは限りません。

ガイド自身や参加者の生命が脅かされる危機に直面した場合、プロのガイドは即座に適切な判断をして行動に移さなければなりません。

生命を存続させる、あるいは守るためには、落ち着いて状況を把握し、生存確率を最大限に高められるように努力しなければなりません。

■事故対応の流れ



※図は「北海道アウトドアテキスト [リスクマネジメント編]」P90より

(2) 応急処置

日本赤十字社、消防署、メディック・ファースト・エイドなどで実施している講習会に積極的に参加して、実践的技術を習得しておきましょう。

5 賠償責任と保険制度

ガイド中の事故によって発生する可能性がある法的責任には、刑事上の責任、民事上の責任があります。これらの処分は、いずれも、ガイドやツアーの主催者にとって不利益なものですが、それぞれ、受ける不利益の性質が異なります。

刑事上の責任とは、例えば、刑法その他の刑罰法規に違反する行動を行ったガイドが、罰金、懲役等の刑事罰を受けることです。

民事上の責任とは、例えば、ガイドやツアーの主催者が、ガイドの不注意で怪我をしてしまったツアー客から損害賠償請求をされ、ツアー客に対して治療費などの支払いをしなければならなくなることです。

ツアー参加者が亡くなったり大怪我をしたりすると、損害賠償額が数千万円にのぼるケースも珍しくありません。ガイド個人やツアー会社がそのような高額な賠償を全て自己負担で行うということは困難であり、最悪の場合、個人や会社が破産せざるを得ないような場合もあります。

万一来て、必ず保険に加入しておきましょう。

〔「第3章 安全を確保するための措置」：
「北海道アウトドア講習／北海道アウトドア検定〔基礎編〕（共通テキスト）」、
「北海道アウトドアテキスト〔リスクマネジメント編〕」（北海道経済部観光局発行）より引用〕